

阪神・淡路大震災時の動物救護活動を振り返る

Looking Back on Animal Rescue Activities in the Wake of the Great Hanshin-Awaji Earthquake

市田 成勝 大震災動物救護メモリアル協議会 会長

Shigekatsu ICHIDA Chairman, The Great Earthquake Animal Rescue Memorial Association



紹介にあずかりました市田でございます。大震災を振り返ってということで、かいつまんでお話ししたいと思います。

震災のときにまず考えたものが、組織づくりということでございます。いわゆる震災が起こったときには、や

っぱり現地で救援本部というか、そういったものが立ち上がらないと、ちょっと第1歩が踏み出せないということです。



【スライド1】



【スライド2】

この三つの団体が集まったわけですが、当時は、そういった現地、あるいはそれを支援する東京本部というものを立ち上げたらということが、お話があったようでございます。【スライド2】

愛護団体、それから獣医師会。獣医師会でも神戸と兵庫県ということで、まるっきりおなじではございませんので、似てはいるんだけど、若干違ったところもあ

るといふこと。微妙なずれということですね。それから、愛護団体に関しましても、獣医師会ともやっぱり違ったところがある、でも、共通のところがあると。その共通のところ、どないか救援活動を行うことができないのかというふうな形のもの焦点になってくると思いま

す。結局、共有できるようなところのものが集まって、この3団体が集まって、それに神戸市、兵庫県というものがアドバイザー的な形で入って、どうしようかというふうな話し合いになったということです。でも、究極的には、この救護センターというものを設置して、動物の救護に当たるんだというふうな形になったわけなんですけれども、この組織をつくる、実際にできたのが1月21日。震災から4日後にはできたということで、非常に早くできたのではないかなと思います。

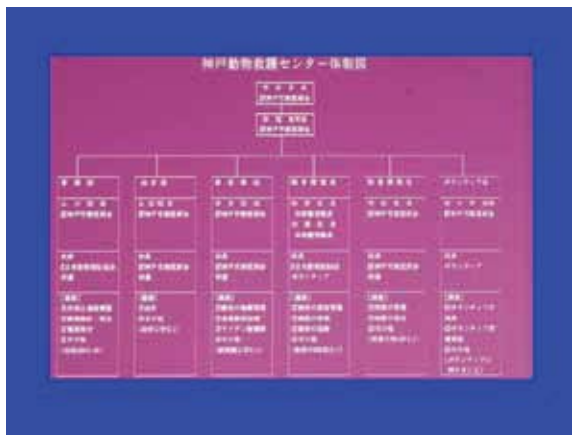
それから、実際に救護センターの設立というふうな形になるんですけども、神戸の場合は北区の動物管理センターがございまして、その中に設置するというふうなことで割と早くできたと、決まったということで、実際には1月22、3日ぐらいから、ぼちぼちシェルターの建設に取りかかったと。これは三田というふうに書いてますけれども、要は場所を探すところということに時間がかかったということで、結果として三田市ということで、若干、奥の方に入っていくところに救護センターができたということです。今現在では、兵庫県の場合は武庫川沿いに愛護館ができておりますし、淡路だとか、三木だとか、加西だとか、あるいは但馬の方にも計画があるということで、そういったものができますと、いわゆる全県的なカバーができるであろうということで、ふだんから、やはり土地、場所ですね、どこにつくるんだというふうな形のものがないと、なかなかすっどできるようなものではございません。

神戸の管理センターというところは、非常にちょっと離れたところと言うんですか、山一つがちょうど大きな墓園になっておりまして、その一角で、近所に防災センターだとか、拘置所だとか、幸せの村だとか、そういったものがある、ちょっと一般住宅とは離れたところがあるので、そういう点では作りやすかったと。

三田の方も、三田ゴルフ場の裏の谷間のところを造

成してつくったと。これも、やはり離れた場所にできたということで、町の真真中にぼこんと持つてくるということは、なかなかちょっと難しいのではないかなと思っております。

だから、ふだんからやっぱり少なくとも土地というものを確保しておくということで、我々の場合はいわゆる地震だけであつたんですけれども、例えば、東海だとか南海地震だとかということになりますと、今度は津波が来ると。こいつは外国なんかである、インドネシアとか、そういうようなところを見ますと、やっぱり10メートルクラスの津波が来てるので、そういうようなところから、まだ防ぐような場所でない、ちょっとぐあいが悪いだろうというふうには思っておりますけれども、非常に対応が、その点ではうまいこといったんではないかなと思っております。



【スライド3】

それから、これは一応、救護センターの体系というんですか、いろんな係をつくってみたということで、いきなりできたわけじゃございませんので。一応、ここの事務班という、いわゆる受け入れのところです。本部のとの連絡だとか、電話受付だとか、業務、それから報告ですね。【スライド3】

報告なんかでもそうなんですけれども、いわゆる新聞社とか、そういったものが毎日毎日電話かけてきて、「今、何頭ですか。どんななってますか」ということで電話をかけてくるんですけど、かけてくるときというのは4時とか、5時とかの時間で、動物飼っていると夕方の世話を、その真ただ中でときに電話かけてくると、そうしますと、非常にたくさんのボランティアさんだとか、動物なんかも出入りしてきますので、非常に厄介なんです。そのかわりがわからないから、どういうんですか、間違いもないしということを書いてみたって、もう新聞社とか、そういったところはオーケーしてくれません。本当は、うまいこといけば、そういう人が、係が1人おつて対応してくれば一番楽かなとは思いますが、

なかなかうまいこといかなかった。

一つ、あとはこれ会計というのがあるんですけど、これはお金の出し入れをするので、重要な場所でございます。当然、閉鎖するときには公認会計士を入れて、精査して、間違いがないというような形に最終的にはなるんですけれども、それまでの毎日の運営というふうな形のもので、大きなものはいいんですけれども、小さな日常のことですね。食事だとか、筆記用具だとか、日用品をちょこちょこ買うという、そういう細かいところというのは非常にやっぱり厄介なので、これもやはり専門の人がおつて、しょっちゅう来てもらうというふうな形でない、なかなか整理がつかないというふうな形で、こういうものがないと、やはりボランティアさんに心地よく働いてもらえるというようなこともできないということです。

それから、獣医療班というのは、これはもう神戸の場合、神戸市獣医師会がでございますので、治療、それから検診だとか、そういったことをするんですけれども、我々だけではとてもじゃないけど数が足りません。当初は、1日にやっぱり50頭、60頭という診療頭数があったと思いますので、朝から晩までやったって、やっとならぬ間に合うぐらいの程度。だから、応援に駆けつけてくれた獣医さん、あるいは学生獣医なんかに行ってやるんですけれども、なかなかうまいこといかない。それで、やっぱり中心になって、こういうふうにしてください、ああいうふうにしてください、これはここでは手に負えませんから、動物病院の方に収容してくださいというふうな形の指示を出さなくちゃいけない。そのときのチーフにならんといかんということで、これは、いきなりなつて、幾ら神戸の会員だからといって、やってくれと言っても、そら、うまいことやれる人もおれば、そうでもない人もおれば、なかなか、やはりそこら辺のチームワークというか、なれる人となれない人というふうな形のものもございました。何だかんだと言いつてもできたということで、何とか踏ん張ったということやと思います。

あとは、この飼育班というのは、これは実際に動物の飼育を担当するんですけれども、これもボランティアさん、このボランティア班とこちらと、やはり連携をしておかないと、どれぐらい一体ボランティアさんが要るんですかというふうな形のもので、だから、今はいい、後は、これぐらいになったら、もうちょっと要るかという日程調整というんですか。それはボランティア班だけが考えたって、実際にはうまいこといきませんから、こういう飼育班なんかと連携をとって、それでやらなくちゃいけないということで、初めのうちは、人が集

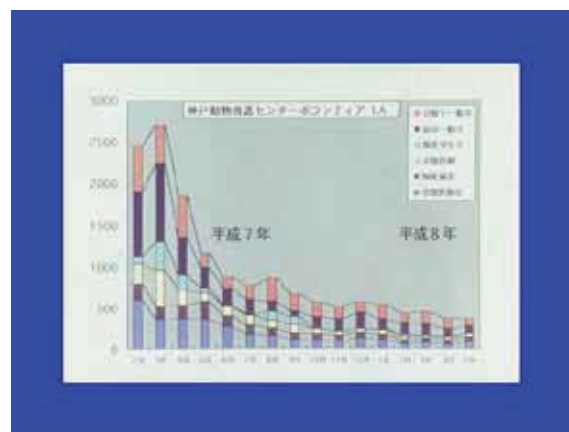
まるかどうかもわからなかったという形なので、もう来てくれ、来てくれというふうなことしか言えなかったんですけども、そのうち、なれてきますと、いついつぐらいから来てくれ、どれぐらいから来てくれ、それから、何をしてくれと、何をしてほしいんだと、それをはっきりこちらが言えるようになって、逆に言うたら、それ、できないので、これしかできないと言ったら、いや、それはもう今は要らないと。また、1カ月後やったら1カ月後に電話してくれというような形のことを言えるようになって、今考えれば、そういったことを、わかっておれば言うべきであろうと。言ってあげて、協力を求めるというふうな形が一番いいのかなとは思っております。

この飼育班とボランティア班の関係ですが、ボランティアというのも、何も動物の飼育ばかりをやっているわけじゃなくて、大事なことは、やはりボランティアさんの生活ですね。それを支えなくちゃいけない。簡単な話、食事をせないかんとか、お風呂場を設置するとか、日用品だとか、いろんなことをやらなくちゃいけないと。そういう方も、実際問題、途中では出てこれたんですけども、やはり、もうちょっと、どういうんですか、組織立ってできれば一番よかったかなと。

例えば、食事問題なんかにしてもそうなんですけれども、ボランティアのそういう団体が近くにあると、申し込みがあったんですけども、何か保健所の関係か何かで、動物なんかと一緒に食事をするようなところは、不衛生だからやめてくれというふうなことを言われたということで、実際問題、食堂に使ってたところは動物のこういう診察台があって、そこで治療して、治療が終わったら、きれいにぞうきんでふいて、そこで食事をしとったわけなんですけれども、別に、それでボランティアさんの方から文句は出たことはない。けども、そういう人が来たときには、これはだめだと。じゃあ、場所がないと、物がないということで、実はあそこに大きなテントがあるやないかと。実は、自衛隊から借りたテントがあったんですけども、その中は救援物資がいっぱい入ってるわけで、そんなもん、ほうり出してというのは無理やと。向こうの言うのは、ここがあいとるから、ここに支援物資等を入れると。ここへ入れたら、診察室がないやないかという話で、ある程度もめて、結果としては、もう結構ですというふうな形になったんですけども、実際には、そういう形のものがもう少し柔軟な形で対応してくれれば、我々もよかったのかなというふうな。こういうのは緊急時なので、例えば、通常の規約を適用すると、実際にはできないと。だから、もうちょっと緩めてくれというふうな形のもの。そういったことも一つ。

特に動物飼育の例えば仮設だとか、それから公営住宅だとか、そういったふうの形のものでは、そういったことを行政さんもやっていただいたんですけども、こと食事だとか、そういったことまではわからなかったのかなというところが一つございます。

一応、こういうふうな形のもので動いていて、センターの運営というような形のもので滞りなく、ある程度できたのかなということはあるんですけども、そういうふうな反省点というような改良の余地は当然あるでしょうと思います。



【スライド4】

これが一応ボランティアの統計なんですけれども、ここが日帰り、これだけが、これが宿泊ボランティアですね。それから、これが学生の獣医さん。それから、ボランティアの獣医さんが来られたと。これが福祉協会と神戸市獣医師会の総数というふうな形のもので、大体この4月ぐらいまで、ここら辺ぐらいまでというのが一つの区切りで、5月12日ぐらいからはプレハブのシェルターがちゃんとしたものができて、それまでは、ここところはビニールハウスの緊急避難的なものであったということで、それが、やはり震災からだんだん月数がたってきたこともあるんですけども、ボランティアさんの数が減ったというのは、そんなに必要がだんだんなくなってきたということで、こういうふうな形。【スライド4】

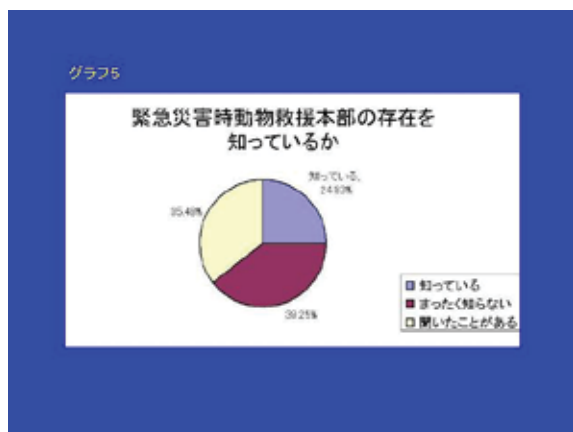
だから、震災が起こったときには、初めはぶわっと来るし、いろんなストレスだとか、いろんな病気の動物も来るしということで、初めのうちは、やはりこういう形ではないかなと。そのうち、やはり被災動物というものがいろいろと受け入れられてきて、数が減ってくれば、当然、ボランティアさんもそんなに必要はなくなるわけですから、徐々に徐々に下がっていく。ここら辺は大体最低限、救護センターを運営するには必要な数というふうな形のものであろうというふうには思っております。だから、ここら辺に来られるという人と、いや、そこはもう、ちょっと無理やけど、例えば夏休みしか来られへ

んとかいうような方でもいいんですけども、やはり何が
 できるか、どんなことができるんだろうというふうな
 形のものを、もう一つ、考え方としては持ってもらった
 方がいいのかなと思っております。

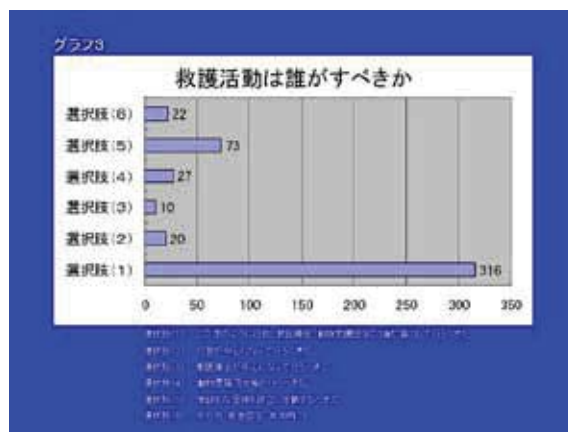
それから、これは先ほどの組織、それから場所、それ
 から人というふうな形のものがあって、その次に、やは
 り資金ですね。活動資金というのが要るので、我々の場
 合は何も、どうなのか、準備というものは全くなかつ
 たんですけど、それで、初期に非常に困ったということ
 があって、我々が行った義援金が大体 8,300 万円ぐら
 い残りましたので、それをもとにして、東京本部という中
 から 5 団体に頼みまして、緊急災害時動物救援本部とい
 うふうな本部をつくっていただいたと。実際には、例え
 ばナホトカ号の油流出だとか、北海道の有珠山だとか、
 東京都の三宅島だとか、そういうような時々の初期活動
 の初期費用ですね。それを出させてもらって、大分活動
 というんですか、スムーズにいけたのではないかなと
 思っております。

当然、今は来る、来ると言われてて来ないような、例
 えば東京直下型だとか、そういったものももし来まし
 たら、もう 8,000 万円ぐらいはすっ飛んでしまうとい
 うふうな形ではないかなと思って、十分な額とは思って
 おりませんが、ある程度の形の目的というものは達成
 できたのではないかなと思っております。

それから、これはアンケートをとって、活動はだれが
 すべきなのだろうと。言う、一番はこれと。いわゆる
 行政、獣医師会、愛護団体、三者協働というふうな、こ
 ういったものが一番いいんじゃないかなということ
 で、次には、常設的な団体を活動すべきだというのがあ
 って、できればいいとは思いつつ、まだ多分できてない
 かなとは思っておりますけども、なかなか難しいところ
 あるとは思います。【スライド 5】【スライド 6】



【スライド 5】



【スライド 6】



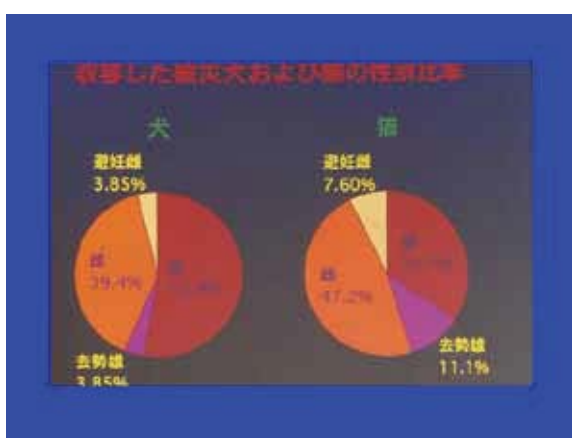
【スライド 7】

それから、救護サイト、動物への対応ということで、
 これは飼い主責任ということで、飼い主さんの動物、我々
 の動物じゃなくて、飼い主さん、もちろん飼い主が飼っ
 てるわけですから、だから、その動物は一体どうするん
 だろうということアンケートをとったものですがけれど
 も、これが断トツですね。これは飼い主さんが引き取っ
 て、ずっと飼えというふうな形。あるいは、自分が全然
 飼えないと判断したら、早く新しい飼い主さんを見つけ
 て、そういう方に頼めというふうな形。【スライド 7】

これは、阪神・淡路のときには、普通はセンターに預
 かるのは 1 カ月、延長しても全部で 2 カ月の間に考えて
 くださいと。どうするのか決めてくださいということ
 を言いました。初めのうちは、いや、家が建つまでとか、
 何だかんだと思ってたんですけども、結局、時間がたっ
 てきますと、アルファ・シンドロームということで、こ
 れはボランティアさんがごろごろ変わってくる。いわゆ
 る動物から見た飼い主が、1 週間、2 週間でころころ
 変わってくるわけなんで、おかしくなっちゃうというふう
 な形。だから、当然飼い方というのが微妙な差が出てく
 るということなので、早いこと飼い主さんを決めてあげ
 るというふうな形が一応ベストではないかなというふう
 に思って、これはやっぱりふだんからそういうふう
 に考えて、対応しておくべきことであろうというふう
 に思い

ます。それが、やはり飼い主責任というふうなことやと思いますし、これは1匹の場合やったらそうですけれども、例えば、これが多頭飼育みたいになってくると、また大変なんで、やはり多頭飼育されてる方はしてもいいんでしょうけれども、やはり災害時だとか、何かあったときにはどうするんだということはやはり決めておかないと、ただ漠然とふえちゃった、飼っちゃったと、それだけではやはりだめでしょうというふうには思っております。

あとは、この2番目に、これはこのことで、どんなことがあっても最後まで飼えというふうな趣旨のことがやろうと思うので、至極ごもっともなことではないかなと思っております。

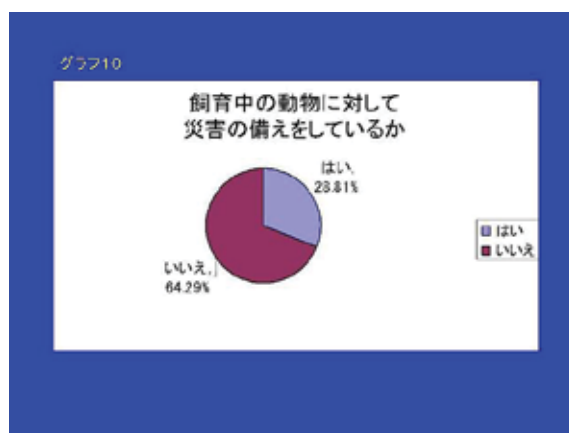


【スライド 8】

それから、これが当時センターに入ったときの、避妊・去勢してる率ですね。だから、犬やったら、3.8ぐらいしかないんですね。猫でも7、ちょっとこれは多くて、11%ぐらい。これぐらいしか、当時、去勢・避妊の数というのはいないんですね。だから、今やったら、もうちょっといるのかもしれませんが、やはりふだんから飼い方というふうなものを決めておいてやらないと、むだな赤ちゃんがでちゃうと。これなんか、一つは、事例としては、やはり仮設なんかに入居するときに、動物の持ち込みはだめだと言ってたのを、やはり行政の方から頼んでいただいて、厳しい条件を出すなということをおいておいたんですけども、やはり仮設から退去するときに、どうしてもやっぱり残ってきちゃう。残ってきて、はっと気がついたときには、むだな子供さんができておるといふふうなことになってしまいますので、やはりこういったことも飼い主責任として、ふだんから対応しておくべきというふうに思います。【スライド 8】

それから、災害の備えをしておりますかということで、はいということで、28.8という形なので、えっと思って、内訳を見ますと、特別なことは何もなくて、簡単な話、名札つけてるぐらいの程度のものなんです。だか

ら、それはそれでいいんです。だけど、それだけじゃ、やっぱりちょっと足らんよと。今であれば、マイクロチップを入れるとか、あるいはふだんからしつけなんかもちろんしておかないといけない。それから、先ほどの避妊・去勢、あるいは狂犬病の注射だとか、フィラリアの予防だとか、そういったこともちゃんとしてください。健康体のものをつくっておいてください。それから、備えというのは動物だけじゃなくて、やはり先ほどの話みたいに連れて逃げるというときに、そんなもんたくさんおったら、とてもじゃないけどだめ。例えば、年寄りの方が大きなラブラドルとか、そういうのを連れて逃げるっていうのは、それはなかなか難しいことであると。だから、その辺のところもよく考えておいてくださいというふうなことかなと思います。【スライド 9】



【スライド 9】



【スライド 10】

これは、救援した1,556頭のうちの、これが全部で481ですか、ここに書いてますけれども、これの分母ということになっております。これだけの約3割の回答があったということで、こういう回答にすれば、いい方だというふうな話を聞きましたので、分母として、こういったものがあったということで、御報告させていただきます。以上です。